

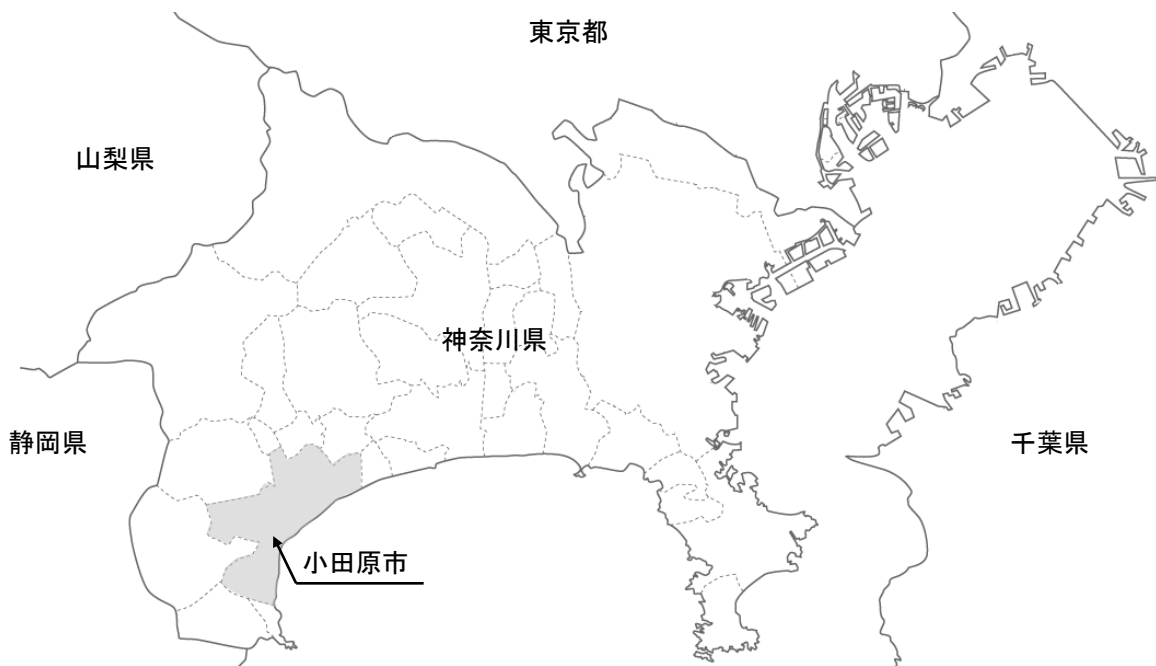
第1章 小田原市の歴史的風致形成の背景

1 自然及び社会的環境

(1) 位置

本市は神奈川県南西部、東京から南西へ約 80km の距離に位置する。市域は、東西 17.5km・南北 16.9km、面積 114.06km² (11,406ha) で、神奈川県全体の面積の 4.7% を占めている。県内の市では、横浜市・相模原市・川崎市に次いで 4 番目の広さを有している。

市庁舎の位置は、北緯 35 度 15 分 41 秒、東経 139 度 9 分 21 秒 (日本測地系) である。市域の南西部は真鶴町・湯河原町・箱根町、北部は南足柄市・開成町・大井町、東部は中井町・二宮町とそれぞれ接している。本市を含む一帯は、湘南地域の西側に位置することから西湘地域とも呼ばれ、中・近世以降神奈川県西部の中核的な都市として小田原城を中心に発展してきた。



小田原市位置図

(2) 地勢・気候

市域の地形は、南西部に箱根外輪山から延びる山地・斜面・台地が広がり、東部は大磯丘陵に相当する丘陵地帯となっている。中央部には酒匂川が南北に貫流し、その両岸に足柄平野が形成されている。また、南部は相模湾に面しているなど、市域は変化に富んだ地形から構成されている。

気候は、背後に山地を控え、南部に相模湾を望んでいることから、年平均気温 16 度前

後と比較的温暖な気候となっている。

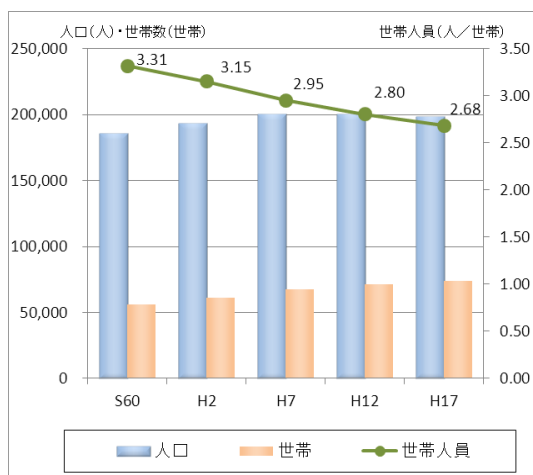
この相模湾に流れ込む黒潮の影響を受けた小田原では、夏は涼しく冬は暖かい温暖な気候と適度な雨量が、生活の快適さだけでなく、気候を活かした丘陵部などで栽培される梅やみかん、平野部で豊富な水を利用して栽培される稲作など様々な農産物の成長を支えている。



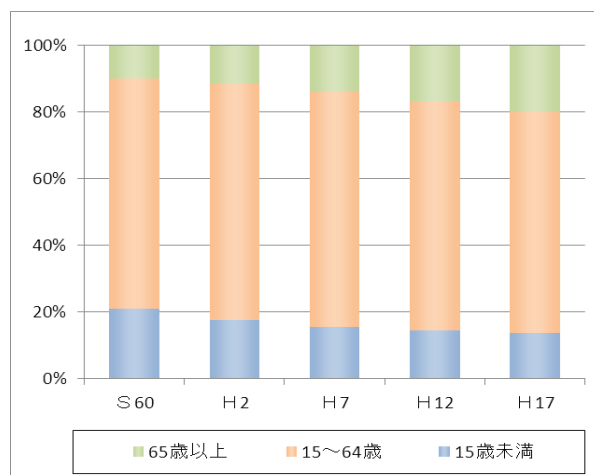
小田原市の地形

(3) 人口

本市は、昭和 30 年（1955）の国勢調査で約 11 万人であった人口が、年々増加し続け、平成 7 年（1995）の調査で、初めて 20 万人に達した。その後も増加傾向にあったが、平成 12 年（1999）をピークに減少に転じ、以降、緩やかな減少傾向を示している。また、人口の年齢構成は、年少人口（0～14 歳）の割合が減少している一方、老年人口（65 歳以上）の割合が急速に増加している。さらには、生産年齢人口（15～64 歳）の比率も減少傾向にあることなど、人口減少社会に突入し、同時に少子高齢化が進むわが国と同様に、本市においても人口減少とあわせて少子高齢化傾向が今後も続くものと予想される。



総人口の推移



年齢（3区分別）人口構成比の推移

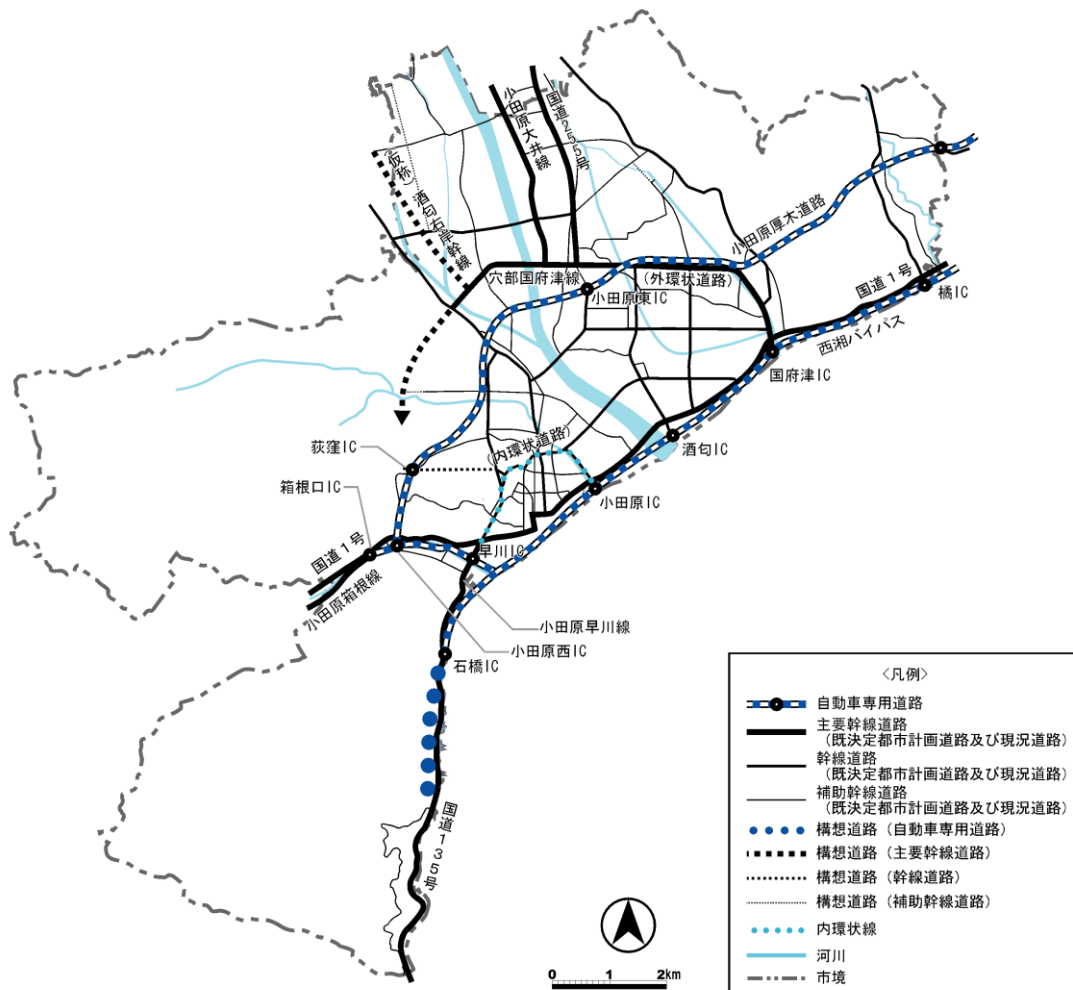
(4) 交通

本市には、小田原厚木道路、西湘バイパスなどの東西方向の自動車専用道路が配置されるとともに、国道1号や国道135号が東西軸、国道255号や県道小田原山北線が南北軸として整備されている。

一般幹線道路網は、小田原駅を中心とした放射環状型の骨格道路網の形成を基本とし、内環状機能を有する栄町小八幡線、小田原駅西口東町線などの未整備区間の整備や外環状機能を有する穴部国府津線あなべこうづのほか、小田原山北線さかえちようこやわた、城山曾比線しろやまそびの整備が促進されている。

鉄道は、JR東海道本線・JR東海道新幹線・JR御殿場線・小田急小田原線・箱根登山鉄道・伊豆箱根鉄道大雄山線の6路線が乗り入れ、市内に18の鉄道駅を有している。特に大正9年(1920)に開設された小田原駅は、現在ではJR御殿場線以外の5路線が乗り入れる県西地区の交通拠点であるターミナル駅となっている。

路線バスは、小田原駅を起点に箱根登山バス・伊豆箱根バス・富士急湘南バス・神奈川中央交通バスの4社が運行している。



2 小田原の都市形成

(1) 原始・古代における小田原の形成

ア 旧石器時代

本市に住んだ人々の最も古い痕跡は、旧石器時代まで遡ることができる。かつて、横浜在住の英国博物学者N・G・マンローが、早川及び酒匂川付近からこの時代の石器に類似した資料を何点か発見し、明治41年(1908)日本初の旧石器時代の遺物として学界に発表したことは考古学史上有名である。その他、^{やつやまのかみ}谷津山神遺跡で旧石器時代終末期(13,000年前)の石器群がまとまって出土するなど、旧石器時代の痕跡が市内8遺跡で確認されている。

イ 縄文時代

縄文時代になると、丘陵部を中心として急速に遺跡が増加する。前期(約5,500年前)に形成された^{はねお}羽根尾貝塚は、神奈川県西部で発見された3例目の貝塚であり、南関東・中部・東海・関西地方の縄文土器のほか、^{こっかくせい}骨角製の髪飾り・釣針、漆塗りの木製容器、木製の^{かい}櫂・弓、獣・魚の骨など、当時の生活の痕跡が生々しく発見された。特に、黒と赤で彩色された漆塗り製品などは、縄文人の持っていた技術の高さを表している。

中期になると、^{くの}久野一本松遺跡で66軒の竪穴住居が発掘調査で確認されており、大規模な集落が営まれて活発な活動が展開されている。このほか、箱根外輪山から延びる市域西部丘陵上に立地する久野・荻窪・水之尾・早川・^{ねぶかわ}根府川や、市域東部の曾我などに縄文時代の遺跡が集中している。

ウ 弥生時代

弥生時代の遺跡も、市域に数多く残されている。その代表的な遺跡が中里遺跡であり、関東地方の本格的な弥生時代集落としては最古のものと位置付けられている。瀬戸内海東部地方の土器が一定量出土したことから、西日本弥生文化との交流があったと考えられている。また、谷津(小田原)遺跡は、かつて「小田原式」と呼ばれた南関東地方中期の土器編年の骨格を担った標式遺跡として、全国的によく知られている。このほか、市域西部の久野・^{たこ}多古、東部の高田・千代・永塚・羽根尾などで弥生時代の遺跡が確認されている。



中里遺跡(現:ロビンソン百貨店)

エ 古墳時代～奈良・平安時代

古墳時代後期になると、久野丘陵に古墳群が造られた。かつて「久野百塚」・「久野九十九塚」とも呼ばれたが、現在は 39 基が確認できる。中でも、小田原市指定史跡である久野 1 号墳は、墳丘の直径 39m、高さ 5.9m の規模を誇る神奈川県内最大級の円墳である。このほか、国府津・小八幡などの低地部でも古墳の存在が確認されているとともに、横穴墓と呼ばれる斜面を掘り込んで築いた墳墓が、田島・羽根尾など市域東部の大磯丘陵に多く造られた。これらの古墳・横穴墓を造った人々は、八幡山丘陵・高田・千代・永塚・羽根尾などに集落を形成していた。

古代になると、市域は、相模国足下郡を中心として一部足上郡、余綾郡に属していた。発掘調査によって多数の瓦や埴仏（仏像の一種）などが発見された千代寺院跡（千代廃寺）は、かつて相模国分寺との説もあったが、現在は足下郡の郡寺と考えられている。

また、永塚・下曾我遺跡では、墨書土器などの出土から足下郡の郡家とされている。

この郡寺や郡家の周辺にあたる高田・千代・永塚には、この時代、大規模な集落がいくつも形成され、この付近には足柄峠越えの官道である東海道が整備されるなど、市域の中心地として繁栄した。

(2) 城下町の形成と発展

ア 城の形成

治承 4 年（1180）、配流先の伊豆国で挙兵した源頼朝は、平家方の大庭景親らと市域南部の石橋山において合戦して敗れたものの、頼朝は九死に一生を得て安房国まで逃れた。その後、再び挙兵して鎌倉入りを果たした。この石橋山合戦では、頼朝方の真田与一義忠とその家臣豊三家康が討死した。なお、この二人を祀った与一塚と文三堂は神奈川県指定史跡となっている。

鎌倉時代末期には、西国に本拠を移す市域出身の御家人もおり、安芸国を本拠とした小早川氏、豊後国の大友氏、備後国に移住した山内首藤氏など、その後大名や有力国人として活躍したことはよく知られている。

室町時代には、応永 23 年（1416）上杉禅秀の乱の戦功によって、翌年大森頼春が土肥・土屋氏に代わって西相模を治め、小田原を本拠とした。

自然地形を巧みに利用した立地となっている小田原城は、これ以降に築かれたと考えられる。当時の城の中心は、現在の天守閣より北西側、八幡山丘陵中腹の県立小田原高等学校付近にあったとされているが、現在も明確なことは分かっていない。

イ 宿の形成

小田原宿は、足柄峠越えにかわって東海道の本道となった箱根越えが発展し始めた 13 世紀末頃に成立したと考えられるが、この頃付近の東海道の宿で賑わっていたのは酒匂宿や国府津宿であった。小田原宿周辺は、農・漁村的景観が広がるなど宿としての規模は未だ小さく、その中心は松原神社がある宮前町にあったと考えられる。

建徳元・応安 3 年（1370）頃までに全 40 巻がまとめられた『太平記』の正平 16・康安元年（1361）の記述において、鎌倉から逃れた畠山国清主従 300 余騎が小田原宿に寄宿した際、土肥氏に夜襲されたとあることから、14 世紀中頃の小田原宿は、多くの人々が宿泊できる規模にまで発展していたことがわかる。この頃には、小田原宿が酒匂宿に代わって西相模における東海道の中心地となっていた。

大森氏が治めた 15 世紀には、小田原城が成立するとともに小田原宿も発展していったと考えられている。16 世紀の小田原北条氏の時代には領国の拡大とともに城下町としての性格を強めつつ発展することとなった。東の新宿から宿の中心と考えられている本町・宮前町を経て西の大窪までの長い街並みが形成されていた。これらの町家は宿場の要素を併存していたと考えられている。

ウ 小田原北条氏による治世

明応 5 年（1496）から文亀元年（1501）以降、伊勢宗瑞（北条早雲）^{いせそうずい}が大森氏から小田原城を奪取し、以降 5 代に渡る小田原北条氏の治世となる。永正 13 年（1518）には、二代氏綱が家督を継いで小田原城を本拠とするとともに、北条に改姓した。その後、三代氏康・四代氏政は勢力を拡大し、氏政の時代には関東一円にまで領地を伸ばした。

天正 18 年（1590）3 月、豊臣秀吉は、総勢 22 万の兵を率いて小田原北条方の支城を攻めながら進軍した。4 月には、石垣山一夜城を造営し、小田原城を包囲した。これに対して、氏政・氏直は、6 万の兵をもって 3 箇月余り籠城したもの、7 月 5 日の氏直の投降によって小田原城は開城された。

その後、小田原北条氏は、氏直が高野山に追放となったものの、天正 19 年（1591）に秀吉から 1 万石の所領を与えられた。しかし、同年氏直が没したため、氏政の弟で氏直の叔父にあたる氏規が家督を継ぎ、その後は河内狭山藩主として明治維新まで大名として存続した。



伊勢宗瑞（北条早雲）

なお、小田原北条氏は「小田原評定」という民主主義の萌芽ともいえる司法・行政などの政務を合議採決する機関を設けていたが、この合戦の際の豊臣方に対する対応で、長く紛糾したことから、「長引いてなかなか決定しない相談」という故事として使用されるようになった。



石垣山一夜城

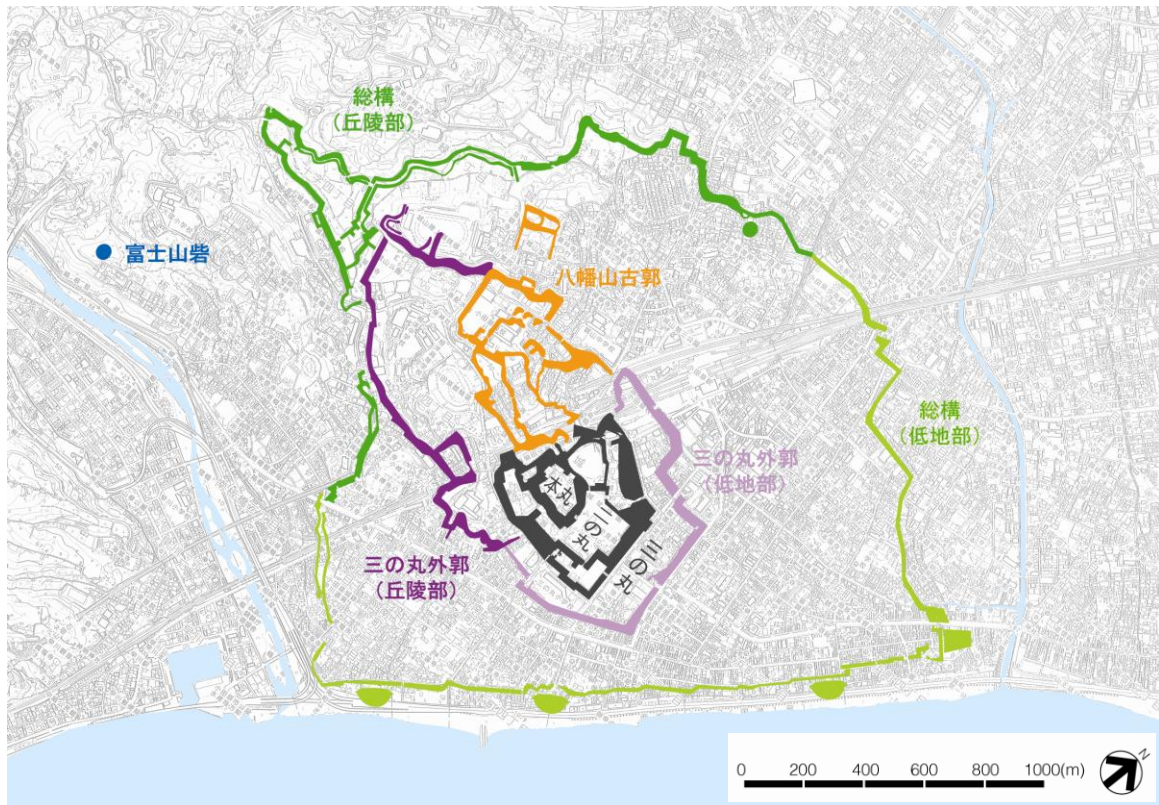
エ 総構の形成による小田原城の拡大

氏康の時代、京都南禅寺の僧東嶺智旺とうれいちおうは、天文 20 年（1551）に小田原を訪れ、「町の小路数万間、地一塵無し。東南は海なり。海水小田原の麓を遶るなり。太守の壘めぐ、喬木森々きょうぼくしんしん、高館巨麗、三方に大池有り。池水湛々、浅深量るべからざるなり。」とこの頃の様子について記している。三方の大池とは、二の丸外郭を指すと考えられることから、この頃には小田原城の中心が八幡山古郭から城下町に近い低地部に移っていたことを示している。16 世紀中頃には、城郭・城下町としての機能を十分に備えていたことがわかる。

氏政の時代になると、永禄 4 年（1561）に長尾景虎（上杉謙信）、永禄 12 年（1569）には武田信玄に相次いで攻め込まれた経験から、元亀 2 年（1571）頃までに低地部の三の丸外郭を造営した。そして、氏直の時代には、天正 15 年（1587）までに新堀など丘陵部の三の丸外郭が造営され、小田原城は着実に発展・拡大していった。

天正 15 年（1587）、豊臣秀吉による関東・奥両国惣無事令そうぶじれいが発令された以降、豊臣方との対決姿勢を強めていった氏政・氏直は、城下をも取り込んだ堀と土塁からなる周囲約 9 kmそうがまえの総構を造営した。この総構の存在こそ、小田原城が中世最大規模の城郭と呼ばれた所以である。この総構は、天正 18 年（1590）の小田原攻めの際、防御の効果を最大限に発揮したことから、後に秀吉が京に御土居おどいを構築するなど全国の城郭に多く採用された。

近世になると、八幡山古郭周辺の丘陵部三の丸は閉鎖され、低地部三の丸に藩の家老屋敷や役所が置かれるなど、城域は低地部を中心に形成された。このため、17 世紀頃のゆえん小田原城は、丘陵部三の丸には中世東国的な縄張りを残したまま、本丸・二の丸・低地部三の丸において石垣の構築などの近世化工事が行われるなど、中世城郭と近世城郭が複合した貴重な遺構となった。



小田原城の構成と範囲

オ 城下町の成立

小田原北条氏の勢力拡大とともに、小田原宿も東海道や甲州道に沿う形で拡大していった。16世紀半ばの氏康の時代には、「相模府中小田原」と呼ばれる領国の政治・経済・文化の中心都市として発展した。城下町の成立は、小田原城が本城となった16世紀の氏綱の時代と考えられ、宿場町としての成立より大分遅れてのことと考えられる。

小田原では、城下の家臣団屋敷群や商人・職人たちの町人地、社寺地が混在して軒を連ねた町々と谷津村の一部を取り囲んだ総構の区域を「府内」と称してきた。しかし、『北条記』に「東は一色より板橋に至迄、基間一里の程に店を張り、売買数を尽くしけり」とあることから、実際には総構の外側に位置する西方の板橋や東方の一色も城下の町々の一部とされていたと考えられている。

城下町に侍屋敷があったことが、今日に伝わる町名や小路名で確認できる。山角^{やまかく}氏が居住した山角町、幸田^{こうだ}氏が居住した上幸田・下幸田、安斎^{あさい}小路・狩野^{かのどの}殿小路などの家臣名に由来する小路名などがそれである。この頃の侍屋敷は、近世のように武家地として集中していたのではなく、町人地・社寺地と混在していたことが大きな特徴である。

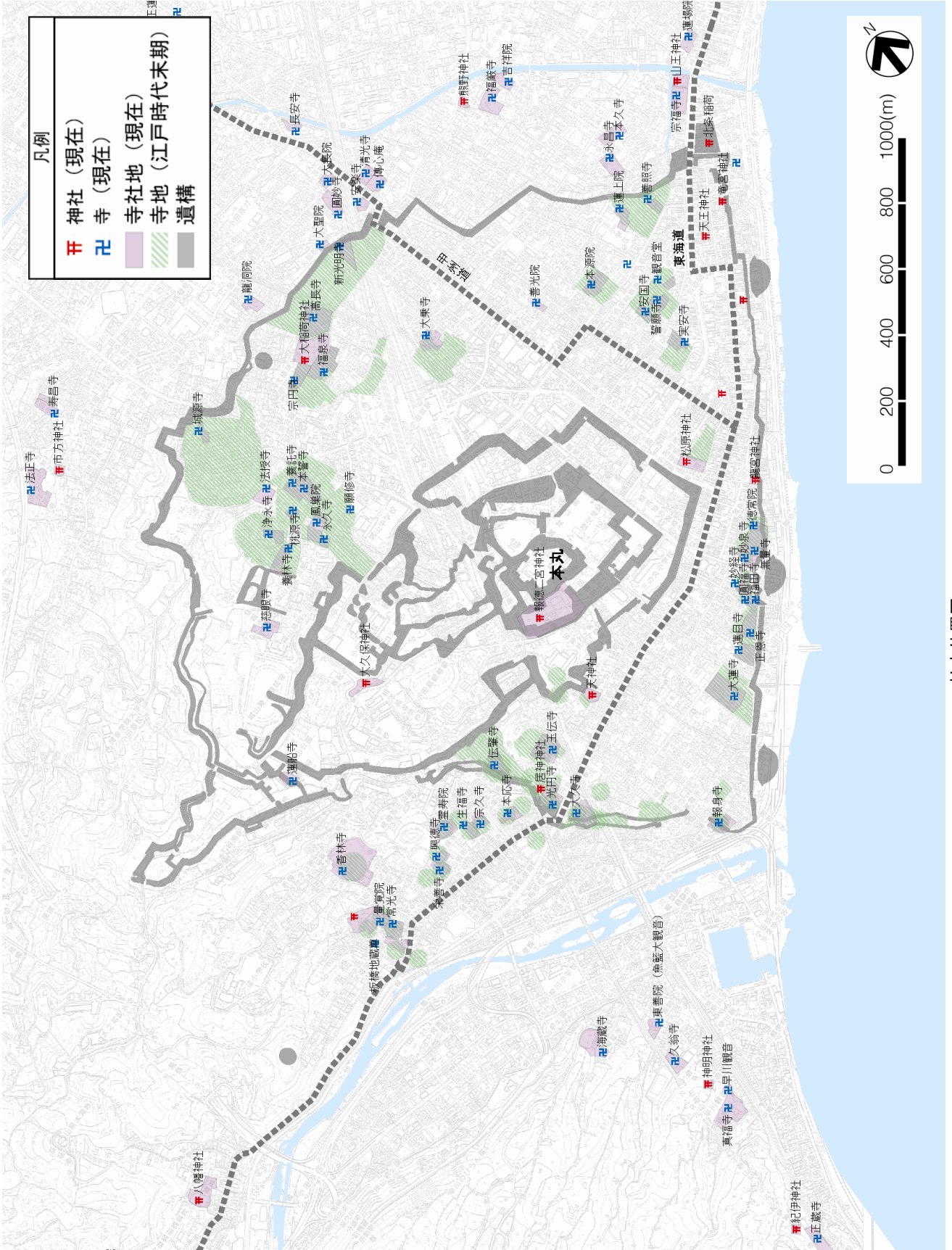
小田原北条氏の領国が拡大され、その支配が強化されていく中で、鎌倉鶴岡八幡宮をはじめとする社寺等の造営に際して、城下には様々な職人達が集まり、府内及び板橋村をはじめとしたその周辺の村に住み着いていった。氏直の時代には、三の丸相当域とそ

の周辺部には北条氏の一族や家臣団の屋敷が建ち並び、その南側を東西に走る東海道沿いと、その途中から北に延びる甲州道沿いには、商人や職人達の町家が軒を連ねるようになった。

また、氏綱の時代以降、城下町には、小田原北条氏一門や、家臣や商人によっても寺院が建立されていった。これらの寺院は、小田原を訪れる客将の宿泊所として、また戦いの際の兵溜としても利用されていた。したがって社寺の配置は、未開地や軍事的に重要な場所に配置された結果であり、その中でも上方方面からの府内への出入り口であった板橋地区には、板橋見附の外側に接する多くの寺院も含め、軍事的要素を第一として配置された。さらには、小田原城南東部の本町・南町といった地域においても、海岸線沿いの元々空地であった土地に、海岸線に対する防備の意味も考慮されて社寺が配置された。



戦国時代の小田原城とその城下



社寺位置図

カ 用水の整備

(7) 小田原用水の整備

北条氏康の時代には、早川から小田原城下に水を引き入れた小田原用水が整備されていた。天文14年（1545）に小田原に立ち寄った連歌師宗牧の紀行文『東国紀行』に、氏康の館の水が早川から引き入れていることを聞いて驚いたことが記されていることから、小田原用水を日本最古の水道とする説もある。

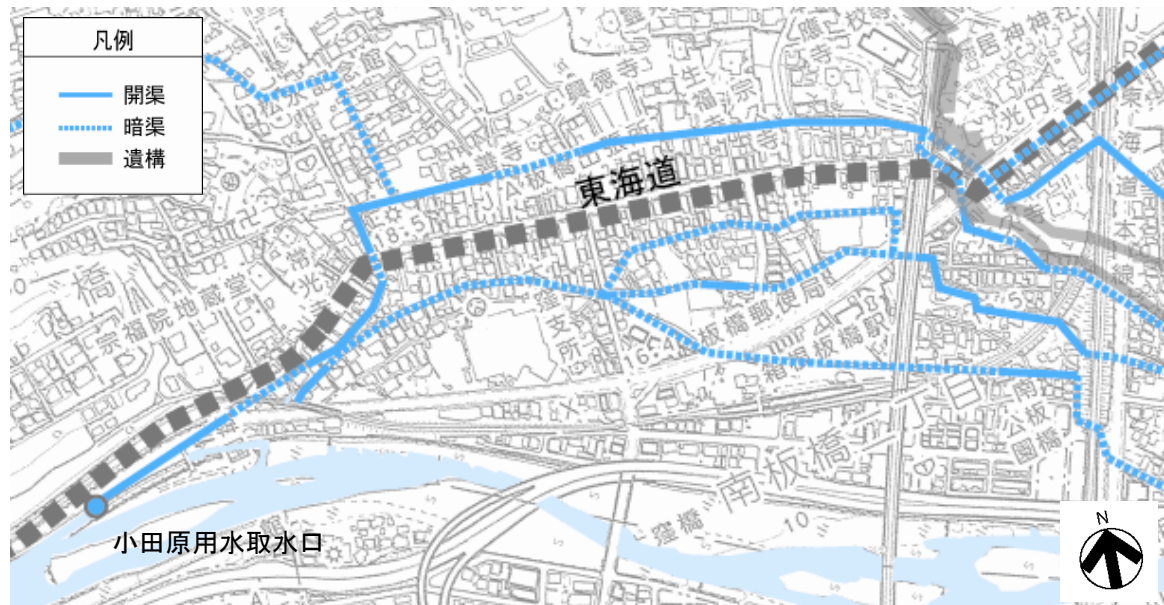
天正18年（1590）の豊臣秀吉による小田原攻めの際に作成されたとみられる『小田原陣仕寄陣取図』（山口県文書館蔵）には、総構の中を流れる川が描かれており、少なくとも天正18年には存在していたことがうかがえる。



今も水を湛える小田原用水



小田原用水取水口



小田原用水位置図

(イ) 荻窪用水の整備

荻窪用水は、江戸時代につくられた農業用水路である。早川から水を引いており、全長約10.3kmとなっている。小田原藩の水田開発事業として開かれ、寛政9年(1797)に工事が始められ、享和2年(1802)頃に完成したとされている。その後、農業だけでなく飲水や水車、発電、工場にも利用されるようになった。



童謡『めだかの学校』の発祥地として知られる荻窪用水

この荻窪用水は、今も全国で親しまれている童謡『めだかの学校』の発祥地として、広く知られている。

キ 漁村としての小田原

本市の東南から南にかけては相模湾が広がっており、古くから沿岸漁業が盛んであった。特に、「舟方村」は千度小路(現在の^{ふなかつむら}本町、浜町周辺)と呼ばれるようになった。小田原北条氏の時代にはこの千度小路を含め古新宿や一色村、原村など酒匂から早川にかけての沿岸集落が形成されていたことが、『廻国雑記』(文明18年(1486))や『北条記』(元和年間(1615~1624))、『新編相模国風土記稿』(天保12年(1841))において記録に残されている。

(3) 近世における城下町・宿場町としての繁栄

ア 近世の小田原城

小田原北条氏が追放された後、江戸に入府した徳川家康による関東治世が始まり、江戸の上方に対する守りの拠点として位置付けられた小田原城には、家康旧来の家臣である大久保忠世が4万5千石で入城した。しかし、その子^{ただよ}忠隣は、慶長19年(1614)に突如改易されて近江国に配流となった。この改易の際、小田原城は、二の丸・三の丸の城門・櫓などが徳川家康・秀忠によって破却され、戦国時代そのままの規模を誇った小田原城に大打撃を与えた。

大久保氏改易後は、幕府が指名した譜代大名と旗本が交代で城番をつとめた番城となった。城番とは、新しい城主が決まるまで暫定的に支配を任された役目で、城主とは性格を異にしていた。この時代、一旦は元和5年(1619)に阿部正次が上総国大多喜より5万石で城主となったが、元和9年(1623)には再び武蔵国岩付へ転封となったため、小田原城は再び城主不在の番城となってしまった。

寛永9年(1632)、将軍家光の乳母春日局かすがのつぼねの実子で、家光の側近でもあった稲葉正勝まさかつが下野国真岡より8万5千石で小田原城主として入封した。その翌年には寛永小田原地震が発生し、小田原城は大きな被害を受けた。このため、この頃から小田原城の近世化工事が本格的に開始された。この工事は、その後も断続的に行われ、延宝3年(1675)に最終的な完成をみたことで、現在みられるような石垣を伴う小田原城が完成した。

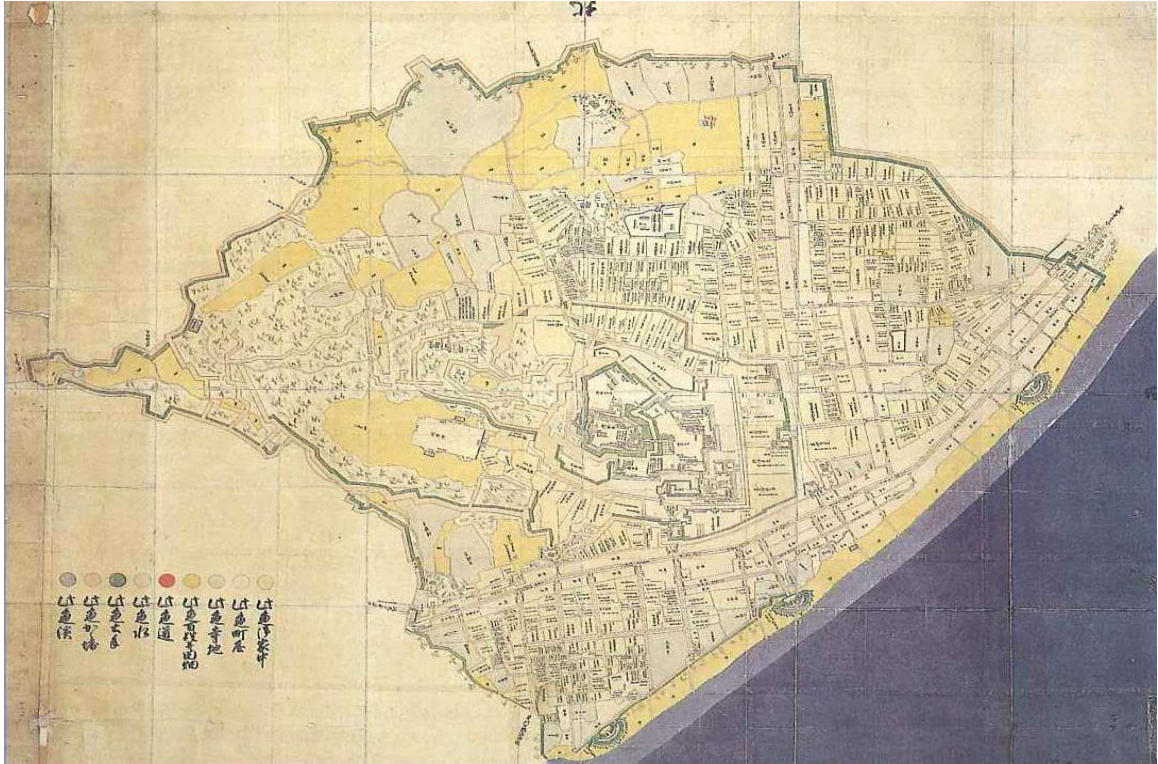
貞亨3年(1686)、大久保忠朝ただともが下総国佐倉から10万3千石で入封し、大久保氏が72年ぶりに城主として復帰した。この時代の小田原城は、嘉永5年(1852)外国船防備のための台場が海岸に3箇所完成した以外、大規模な改修は行われなかったが、元禄16年(1703)の元禄地震、宝永4年(1707)の富士山噴火、天明2年(1782)の天明小田原地震、文化14年(1817)の小田原宿の大火、嘉永6年(1853)の嘉永小田原地震などの災害に相次いで見舞われ、いずれも幕府の官金による復興が行われた。このように、災害の復興に明け暮れる日々を送ったことで、小田原は藩の維持が精一杯の状態で明治維新を迎えた。

イ 近世の城下町

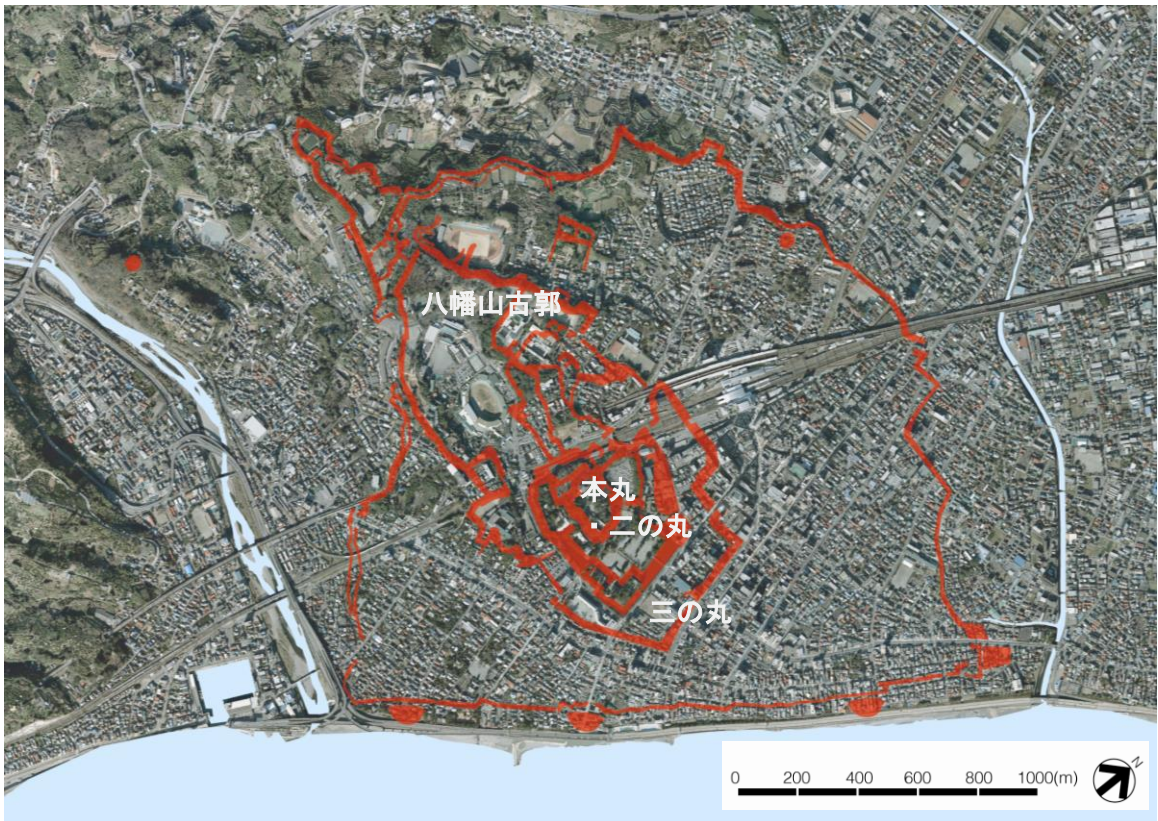
近世の城下町は、寛永9年(1632)以降に稲葉氏が行った小田原城近世化工事によって成立した。それは、小田原北条氏の城下町を基本としつつ、東海道江戸口の付け替え、東海道から大手門へと続く御成道おなりみちの整備、東海道板橋口付近に寺町の形成などが行われ、近世城下町の基本的な町割が完成した。その町域や町割は、ほぼそのままの形で現代まで受け継がれている。当時の町割は、短冊形地割や鍵折れの道の形態により確認することができ、現在の自治会の区分けが当時の町割とほぼ同一の形で残されている。

この頃、東海道沿いに通り町とお ちょうと呼ばれた九町(山角町・筋違橋町・欄干橋町・中宿町・本町・宮前町みやのまえちょう・高梨町よろつちょう・万町しんしくちょう・新宿町)があり、東海道南側の海岸沿いの四町(茶畑町・代官町せんだこうじ・千度小路こしんしく・古新宿町)及び東海道を起点として北へ向かう甲州道沿いの六町(青物町いっちょうだちょう・一丁田町だいじくちょう・台宿町すとうちょう・大工町たけのはなちょう・須藤町わきちょう・竹花町)の脇町十町の合計十九町の町人地が形成された。

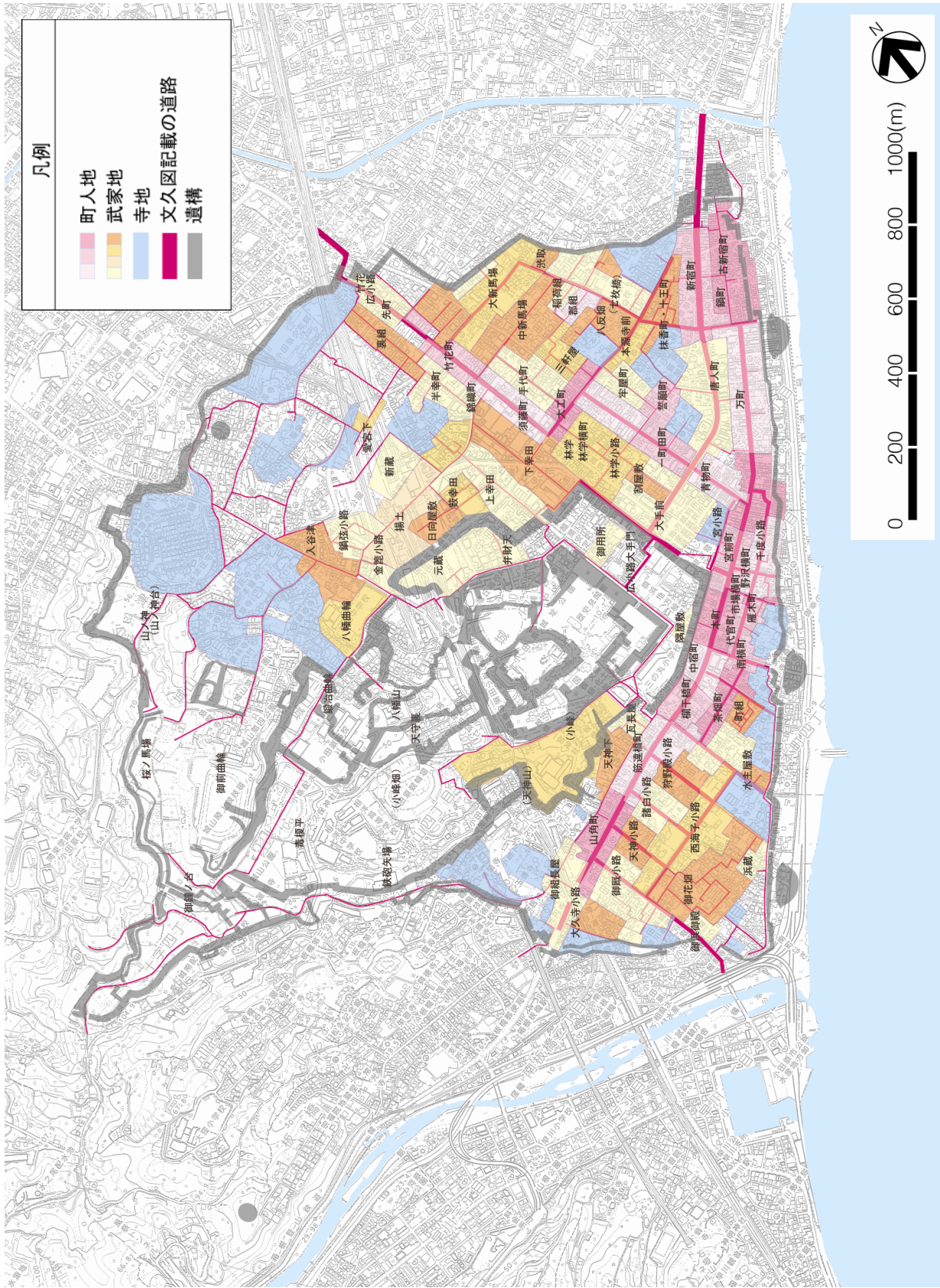
町人地の屋敷割は、有力町人の屋敷を除いて東海道・甲州道の両側に間口5間、奥行20間程度の短冊形の区画となっており、現在の土地利用もこの屋敷割が基本となっている。この短冊形の土地に建てられた町人地の家の多くは、板屋根を割竹でおさえる小田原葺ぶき(トントン葺)という屋根であり、瓦葺は有力商人などの家に限られていた。この町人地を囲むように武家地・社寺地が配置されており、近世城下町は武家地・町人地・社寺地が比較的明瞭に区分されていた。このうち、城下の武家地は、中・上級家臣の屋敷地と足軽・中間といった下級家臣が集中する区域に二分される。



小田原城絵図：文久図（1861-1863年頃）



上空から見た小田原城（2008年撮影）



凡例

- 町人地
- 武家地
- 寺地
- 文久図記載の道路
- 遺構

江戸時代の町割と道路

市域北部の栢山村^{かやまむら}では、天明7年(1787)に、二宮金次郎(後の尊徳)が誕生した。比較的裕福な農家の長男として生まれたものの、酒匂川の氾濫等による田畑の荒廃に伴う過労によって両親を失い、叔父の家に預けられることになった。

金次郎は、作業の合間に、稲の捨て苗や菜種を空き地に植えて収穫し、「積小為大(小を積んで大となす)」の経済原理を体得し、一家の再興に成功した。

その後、この手法を生かし、発展させて近親者の家政再建し、若党として仕えた小田原藩家老服部家の財政を建て直し、窮乏藩士救済のための金融互助組織「五常講」を設立、さらに藩の年貢徴収用の斗枘の改良統一も達成した。そこで、藩主大久保忠真^{ただかね}から見込まれ、財政難に苦しむ藩主の身内である旗本の野州(栃木県)桜町領の財政再建を託された。文政元年(1818)には、忠真が「心かけ宜敷者^{よろしき}」として13名を表彰したうちの1人となった。



尊徳座像

その後は、下野国桜町領を始めとして谷田部(茂木)藩・烏山藩など下野・常陸両国内の復興に際して報徳仕法を説いて財政の再建を実践し、用水の整備や貧者の救済など大きな成果をあげるとともに小田原藩の復興にも尽力した。二宮尊徳は、安政3年(1856)に70歳でその生涯を終えるまで、報徳仕法によって600を超える村々を貧困・困窮から救済したといわれている。

ウ 宿場町の発展

徳川幕府による江戸と京都を結ぶ東海道の宿駅制度の整備着手に伴って、小田原は、東海道箱根越えの東側の玄関口として発達し、参勤交代の大名や旅行客の往還に伴って本陣や脇本陣、旅籠などの宿泊施設が数多く設けられ、東海道有数の宿場町として大きく発展した。小田原宿には、諸大名が宿泊する本陣が4軒、脇本陣が4軒あり、東海道の宿で最も多かった。また、庶民が利用する旅籠も軒を連ね、天保期(1830~44年)には95軒を数えるなど、小田原は東海道屈指の宿場町として賑わいを見せていた。

本陣は、大清水といわれる宮前町の清水家、本町の久保田家・片岡家、欄干橋町の清水家といった有力な上層商人の経営するものであった。旅籠は、東海道沿いの欄干橋町・中宿町・本町・宮前町・高梨町に集中しており、宮前町から筋違橋町^{すじかいばし}にかけての一角が、最も賑わっていたところである。



本陣、脇本陣等位置図

このように、江戸時代の小田原宿は、関東の西の出入り口として「入り鉄砲に出女」といわれた難所である箱根の関所を控えた宿場として、大いに賑わったのである。

また、町人町には、宿泊逗留者や旅行者にあわせ、土産屋や食事、雑貨、衣料、漁屋といった商家が建ち並び、活気に満ちていた。天保13年(1842)の『竹の花坪帳』によると、その業種は16業種にもものぼり、様々な商品が豊富に揃っていた。

またこうした発展の結果、宿内において魚食が普及し、人口増加に伴った需要増加など、宿場町小田原の発展とともに漁業が発達し、城下の形成過程において、東海道筋の裏通りの位置づけがなされた千度小路周辺は、江戸時代に漁業や廻船業、魚商などが多く居住し、小田原の漁業の拠点的地域であった。さらに、大工職をはじめ、塗師や建具、木挽などの小田原北条氏以来の職人も多く居住し、宿場町のさまざまな機能を担っていた。

(4) 明治以降の都市形成

明治3年(1870)には、小田原藩が明治政府に対して廃城届を提出し、天守閣・門・櫓^{やぐら}など5棟の建物は900両で民間に払い下げられて解体された。さらに、翌年の廃藩置県によって小田原は小田原県の県庁所在地となり、小田原藩政は完全に終止符が打たれた。同年には、相模國小田原県と伊豆国韮山県を併せた足柄県に改組となったものの、明治9年(1876)には、足柄県が分割され、市域を含む相模国部分は神奈川県に、伊豆国部分は静岡県に編入されたことにより、小田原は県庁所在地から解かれた。そして、明治22年(1889)の市制町村制施行により、小田原城総構内のうち谷津村を除いた部分が小田原町として誕生した。

また、明治20年(1887)には、東海道本線が東京から神戸まで開通したものの、国府津から御殿場を経由するルートであったことから、小田原はその恩恵を受けることがで

きなかった。このため、翌年には国府津・湯本間に小田原馬車鉄道（後の小田原電気鉄道）、明治 29 年（1896）には小田原・熱海間に豆相人車鉄道（後の熱海鉄道）が開通し、小田原が何とか交通の発展から取り残されないような努力が払われた。

小田原馬車鉄道が開通した明治 21 年（1888）、当時注目されていた海水浴や海岸リゾートのための旅館おうめいかん鷗盟館が開業した。その後、同様の旅館が相次いで開業したほか、明治 23 年（1890）には伊藤博文が別荘せうろうかく滄浪閣を建設するなど、大正期にかけて山縣有朋・益田孝など政財界要人の別荘・別邸が数多く建設されて繁栄した。

小田原町への玄関となっていた国府津でも、日露戦争以前に大鳥圭介や大正天皇の侍従をつとめた加藤泰秋などを中心に、徳川慶喜や西園寺公望が来往するといった社交界が形成されており、1908 年（明治 41）に大隈重信によって別荘が設けられるなど、国府津における政財界からの人物往来も頻繁であった。



昭和初期の小田原駅

大正 9 年（1920）には熱海線国府津・小田原間が開通し、さらには昭和 9 年（1934）に丹那トンネルが完成して小田原・沼津間が開通した。これによって、熱海線は東海道線に改められ、小田原は交通の要衝として脚光を浴びるようになった。

大正 12 年（1923）、相模湾北西部を震源地とするマグニチュード 7.9 の関東大震災が発生し、家屋の倒壊後に火災が各所から発生するなど甚大な被害を受けた。このため、関東大震災以前の建物は、現在ほとんど市域に残っていない。

昭和 15 年（1940）には、小田原町、足柄町、大窪村、早川村、酒匂村の一部が合併し、小田原市が誕生した。

その後、昭和 23 年（1948）に下府中村、昭和 25 年（1950）に桜井村、昭和 29 年（1954）に豊川村と国府津町・酒匂町・上府中村・下曾我村・片浦村、昭和 31 年（1956）に曾我村の一部との合併を重ね、昭和 46 年（1971）には橘町と合併して現在の市域となった。

昭和 39 年（1964）東海道新幹線が開通し、東京・横浜方面への所要時間が大幅に短縮され、観光・ビジネス両面で市域に大きく寄与することとなった。この開通に先立ち、市域中央部の鴨宮かものみやには、東海道新幹線試運転のための基地が設けられ、昭和 37 年（1962）から横浜・熱海間で実験と改良のための試運転が何度も繰り返された。

3 小田原の風土

『新編相模国風土記稿』(天保12年(1841))には、小田原地方の土産について、小田原宿の土産として透頂香とうちんこう(ういろう)、鱧鯪ついで(塩辛)、提燈ちようちん、梅実、石橋や米神、前川の土産として蜜柑こめかみ、石橋や米神、根府川の土産としては根府川石や小松石、久野の産物として柿実や梨子わらび、蕨たい、海には、鯛まぐろや鮪かつお、鰹ひらめ、比目魚あじ、鱈さば、鯖という記述がある。各地域の産物の記述に農産物や海産物、工芸品、石材まであることから、当時の小田原には様々な産業が息づいていたことがわかる。さらに明治時代に入ると交通網が発達したことで、販路が広がり、生産額が増える産業が出てきた。

(1) 漁業及び水産加工業

小田原地方は、定置網漁業地として知られており、その中心的な漁場は、江之浦えのうらや米神である。定置網出現前の小田原の漁業は、戦国時代から江戸中期にかけて飛躍的に発展し、江戸初期には早川・山王原・酒匂・小八幡等に藩から舟役が課せられており、舟や漁民の数が増加したことが分かる。寛文12年(1672)の漁業関係の記録によれば、四艘張網よそぼり、海老網ぶり、鱒網ぼううけ、棒受網たいながなわ、鯛長縄はりあみ、ぼら網などの張網漁業が行われていたことが記載されている。大正になると、小田原町の産業の中で、水産は、第一位の産額を占めるほど、活況を呈していた。



小田原海濱漁網 (東海道名所画帖 嘉永4年(1851) 神奈川県立図書館蔵)

前川では、戦国時代、塩業が営まれていた。この塩は、小田原北条氏に納めていた重要な品だったことが古文書からうかがえる。また、漁獲の増加に伴い、鰹のたたきや塩辛が製造され、宿内の名物として知られていた。17世紀中頃には、相模湾で大量に獲れたイカを漬物屋の美濃屋吉兵衛が大量に買い取り、塩辛を製造するなど加工品も生み出された。

「小田原蒲鉾」は、小田原地方の沿岸漁業が盛んになり、漁獲高が著しく増加したため、魚商が鮮魚の売れ残りの処理や保存利用する方法として、全国各地で製造されていた蒲鉾を参考に小田原蒲鉾を製造したと伝えられている。明治時代に入ると交通の発達と共に販路を拡大したことで、蒲鉾の生産量が急激に増大していった。そこで、明治時代の中頃から、小田原のかまぼこ屋を取りまとめる同業者の会がつくられ、現在は「小田原蒲鉾協同組合」が小田原蒲鉾の発展に資する活動を行っている。

また、蒲鉾だけでなく干物製造、特にアジの干物についても江戸時代の頃から評価が高く、小田原の重要な水産加工品として、現在も変わらず製造されている。



小田原蒲鉾協同組合と加盟企業の屋号

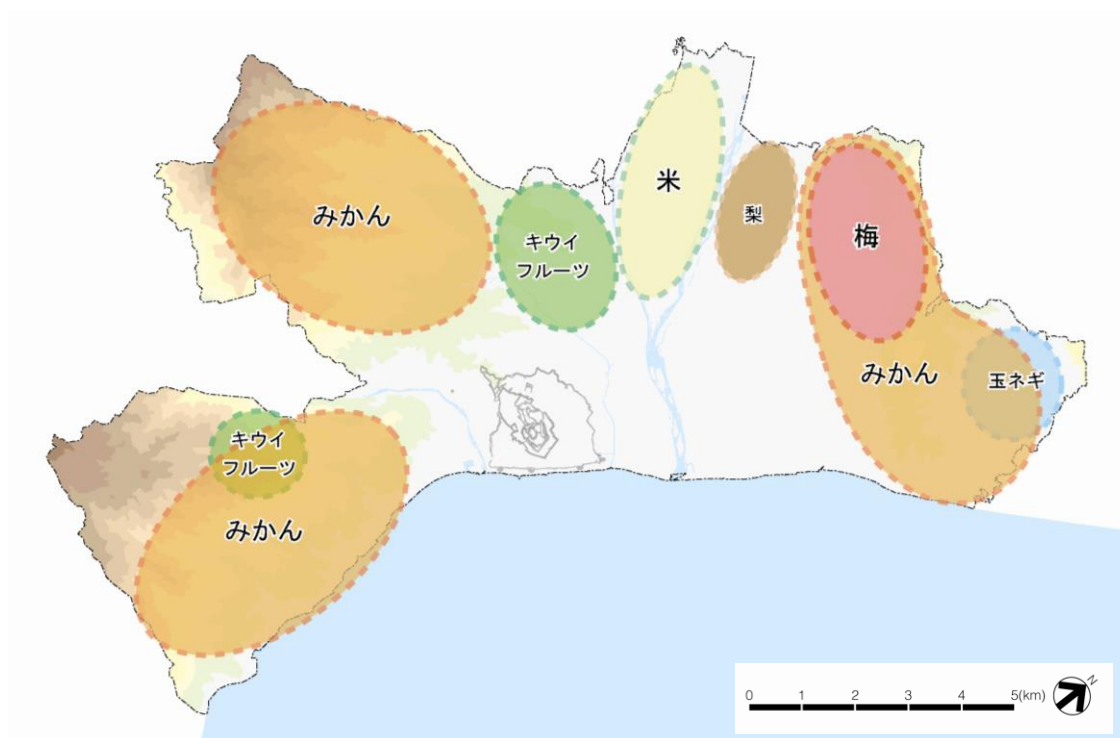


小田原ひもの協同組合と加盟企業の屋号

(2) 農業

小田原市の農業は、梅やみかん、水稻に代表される。梅は北東部にある曾我梅林を中心とした地域で、みかんは箱根山東部斜面の片浦や早川など、東部の大磯丘陵周辺の曾我や国府津などを中心に栽培されている。また、水稻は神奈川県下有数の米どころとして酒匂川を中心とした平野部で栽培されている。

一方で、水田作による梨や柿が古くから栽培されているほか、玉ネギ、茄子、ほうれん草、大根等の野菜づくりも行われている。近年では、みかんの転作としてキウイフルーツや晩柑類の栽培、ビニールハウスを利用した^{かき}花卉、野菜、果実等の多様な作物が生産されている。



小田原市における農産物の主な産地

ア 梅

梅の栽培は500年以上の歴史があるとされ、梅干は、疲労回復や解毒効果など多くの効果があることから、戦国時代には兵糧として、江戸時代には旅に欠かせないものとして親しまれた。幕末期になると生産拠点が府内から曾我地区に移転し、明治以降にその商品化が進んだ。

特に小田原梅干の製造は、明治以降に軍需物資として需要が高まったことで盛んになった。



梅の実

その後、第2次世界大戦後にかけて、一時生産が減少したものの、昭和30年代に入ると再び人気を博し、小田原を代表する特産品に成長した。

また、城下には、今日でもこれら特産の梅を菓子に加工する菓匠が多く、小田原の街が梅の香に包まれる2月には、和菓子屋の店先に、甘露梅、梅風露、梅の中、小田乃梅など、小田原特産の梅を使った50種類以上の名産菓子が並ぶ。



梅まつりの様子

イ みかん

みかんは、箱根山東部斜面の片浦・早川・久野地域と、東部の大磯丘陵周辺の曾我・下曾我・田島・国府津・橘地域を中心に栽培されている。

これらの地区は、丘陵地であることから、のづら野面積みで整備された段々畑で栽培されており、この段々畑の石垣は、箱根火山の溶岩や石垣山一夜城の石垣などが用いられているとされている。



小田原で採れる柑橘類

ウ 水稲

酒匂川を中心とした肥沃な足柄平野は、水田作付けを中心に近代以降順調に発展を遂げていた。明治後期には、足柄平野での農業の経営は水田が中心で、裏作に麦を栽培し、一頭の馬を使用し、あとは家族労働によって経営するという形が典型的であった。

高度成長期前には水田面積が樹園地よりも大きかったが、高度成長期以降は、みかんを中心とした樹園地の作付面積が逆転し、本市の主要産物は米作から果樹栽培へ変化していった。



二宮尊徳お手植えの松と水田

(3) 伝統工芸・産業

小田原では、小田原城下の発展に伴って職人たちが多く来往し、これらの職人たちから伝えられた中央の先進技術は小田原の職人技術に大きな影響を与え、後に茶湯釜「小田原天命」や甲冑「小田原鉢」、漆器「小田原彫」などの「小田原物」と呼ばれる数多くの武具・美術工芸品等が生み出された。

江戸時代には、^{ばんしょう}番匠・大工や石切り、鋳物師、紺屋、畳刺などの職人が居住していたとされており、小田原で生み出された「小田原物」の多くは、中央の優れた工芸技術を身に付けた職人達の手によるものであるが、小田原という地で育まれていく中で独自の輝きを放つものとなった。

ア 木工芸

(7) 小田原漆器

小田原漆器は、北条氏康が塗師を城下に招いたことから、^{いろうるしぬり}彩漆塗の技法が始められ、発達していった。

江戸時代には盆、椀等の日用品の他に武具類にも漆を塗るようになり、実用的な漆器として、技術が確立され、昭和 59 年（1984）に通商産業大臣（現・経済産業大臣）指定の伝統的工芸品に指定された。



木地挽き作業

(4) 寄木細工

寄木細工は江戸時代後期に箱根畑宿で始められ、当初は^{らんよせぎ たんいもんよう}乱寄木や単位文様による寄木細工が主流であった。明治初期に静岡方面の寄木技法がもたらされ、^{こよせぎ}連続文様の小寄木として確立された。これらの寄木細工は、街道土産として需要が高まった。さらには、江戸末期には、江戸だけでなく外国へも売られ始めていた。

また、大正時代になると、指物、挽物細工とも製品が多様化していった。そのような中、山中常太郎によって創始された組木細工は、国内だけでなく、海外にも輸出された。初代山中常太郎から4代目山中成夫の作品の一部は、小田原市重要文化財に指定されている。



寄木細工

(ウ) 木象がん

木象がんは、江戸時代に手彫りの彫り込み象がん技法として始まり、明治時代の白川洗石によって、糸ノコ引き抜き木象がん技法が開発され、量産技術が確立された。この技法は、この地域特有のもので他の産地にはないものである。



木象がんの作業風景

(エ) ちょうちん

童謡『お猿のかごや』（作詞者：山上武夫、作曲者：海沼実 昭和13年（1938））で有名な小田原提灯は、江戸時代中期に小田原の提灯職人甚左衛門が考え出したといわれている。

畳んだ時に胴の部分が同じ直径のリング状中骨による蛇腹形状を持ち折りたたんでの携帯がしやすく、蓋に収まるように作られており、通常の提灯と異なり中骨が平たく、紙との糊代面積が大きいために剥がれにくいものであったことから、雨や霧に強いものであった。

さらに、作業工程が簡単なため、安価であり、大雄山最乗寺の神木を一部材料に使い、狐狸妖怪に対して魔除けになると宣伝したこともあわせて、江戸時代に大人気商品となった。



小田原提灯

イ 鋳物業

小田原鋳物は、天文3年（1534）に河内から来往した山田二郎左衛門が鋳物業を開いたことが始まりである。小田原北条氏の庇護の下、その生産量を拡大し、大久保氏の時代には、相模国の半数以上の生産量を誇るまでに成長した。この山田氏に小田原北条氏が使用する日常用品を注文していたと『北条氏康朱印状（相州文書）』に記載されており、^{かななべ} 鑪鍋や^{かんす} 鑪子、火鉢などが納められていた。

『釜師由緒』（元禄13年（1700））によれば、小田原で鋳られた茶釜が小田原天命と呼ばれ、関東名茶湯釜の一つに数えられていたことが知られる。小田原でこのような茶湯釜が鋳造されるようになったのは、小田原に千利休の高弟である山上宗二が来遊し、茶湯が流行したことにも起因する。

今日、これらの技術を継承する者はわずかだが、名産の風鈴などにその技術は引き継がれている。



御殿風鈴

ウ 石材業

小田原北条氏による鶴岡八幡宮造営工事に際して、小田原大窪（板橋）在住の石切が参加していることが『快元僧都記』^{かいげんそうづき}に記されている。大窪に住む石屋善左衛門は、小田原北条氏の直轄の石切として、公方御用に従事するようになり、やがて小田原北条氏の石切棟梁としての地位を与えられた。

小田原北条氏滅亡後、徳川家康から焰硝蔵^{えんしょうぐら}の石組みの見事さが認められ、その命に従い、江戸城の石垣工事を行うなど、幕府召抱えの職人となっていった。江戸時代に入り、江戸城の構築や修築、大名屋敷からの需要など、大消費地である江戸に近いという地の利が生かされ、小田原の石材業は著しい発展をした。

また、小田原周辺の地域には、豊富な石材の産地を有していたことから、幕府は御用丁場^{ごようちょうば}（採石場）を確保し、管理を諸藩に委ね、大名達も自領からの運搬などの労力を省くためここに採石場を持っていた。産石量の多かったのは、根府川、岩・真鶴（現在の真鶴町）で、その他には板橋、米神、石橋にも採石場が存在した。

なお、近年、江戸城普請のための採石場の遺跡が早川や石橋で発見され、発掘調査が行われている。これら石丁場と呼ばれる遺跡は今後さらに発見されることが予想され、良好な状態を保っているものについては、適切に保存・活用を図っていく。

(4) 小田原の町並み

江戸時代から宿場町として栄えた地区では、明治時代以降も江戸時代からのなりわいが続いてきたが、関東大震災の際に大きな被害を受けた建物も多く、建て替えが進んでいる。その後、戦災や建物の老朽化、社会情勢の変化等もあり、旧脇本陣である古清水旅館をはじめとして、特に旧東海道沿道では建物の近代化やなりわいの変化が進みつつある。

このような状況の中、本町や浜町、板橋地区などを中心に今も残る貴重な店舗・工場の一部は「街かど博物館」としてなりわいをそのままに店舗の一部が博物館として公開され、小田原を訪れた観光客が小田原の歴史や魅力に直接触れることができるようになっている。また、板橋や南町に残る別邸の中には、「小田原ゆかりの優れた建造物」として指定され、その保存と活用が図られているものもある。

ア 千度小路

(7) 籠清

籠清は、文化11年(1814)に創業した。小田原蒲鉾の老舗として、歴史と伝統を受け継ぐ製造方法と原料を用いたなりわいが現在も行われており、出桁造り^{だしげた}の特徴ある建物は、この地域における代表的な店舗として、当時と変わらぬ風情が感じられる。

この店舗は関東大震災後の大正13年(1924)に再建されたもので、軒先に掲げられている檜の厚板の看板に書かれた「加古清」という文字は、三井物産の創設に関わった実業家である益田孝^{どんのう}(鈍翁)の筆によるものとなっている。



現在の籠清店内と益田孝が揮毫した「加古清」の看板

^{かごつね}
(イ) 籠常 [街かど博物館]

籠常は、明治 26 年（1893）に籠清の鯉節部門が独立して創業した。

籠清同様、関東大震災以後の大正 13 年（1924）に再建された出桁造りの特徴ある建物において、今も削り節の製造とその量り売りが行われている。

衛生面の関係から、生からの節の製造は、県外に移ってしまっているものの、店の裏手の製造工場ではカビ付け作業が現在も行われており、往時の様子を垣間見ることができる。



籠常

(ウ) 丸う田代 [街かど博物館]

丸う田代は、かまぼこ通り沿いで鮮魚商を営むかたわら蒲鉾の製造を始め、明治初年の創業以来、140 余年にもわたり蒲鉾製造を行っている。

関東大震災により、大正 13 年（1924）に建物は建て替えられた出桁造りの特徴ある建物の一部が今も残されている。



丸う田代

^{すずひろ}
(イ) 鈴廣

鈴廣は、慶応元年（1865）、村田屋の屋号で魚商を営んでいた四代当主である村田屋権右衛門が、小田原の魚河岸に近い代官町（現在の本町）にて蒲鉾製造を始めた。

本店や工場は現在、地区外に移転してしまっていたが、昭和 30 年頃まで使われていた店舗が今もそのままに残されている。



鈴廣旧店舗

イ 旧東海道沿道

(7) 濟生堂薬局小西本店 [登録有形文化財・街かど博物館]

濟生堂薬局小西本店は、江戸時代初期から旧東海道に面する現在地（旧中宿町）にあり、薬種商を営んできた老舗である。

建物は、関東大震災で倒壊した明治時代のものを大正14年（1925）頃に復原したもので、木造・平屋建、寄棟造、棧瓦葺、平入で、正面に銅板瓦棒葺の下屋庇をつけている。柱など主要部材には檜材が用いられており、石造りの薬種蔵を内包した純和風の建築物である。



濟生堂薬局小西本店

ウ 旧甲州道沿道

(7) 江嶋 [街かど博物館]

江嶋は、寛文元年（1661）に創業し、茶・和洋紙・茶器ならびに海苔等の卸、小売商としての老舗である。

関東大震災で倒壊後、昭和3年（1928）に建て替えられ、入口まわり以外は、ほぼ当時のままに残されている。扱う商品が茶と紙ということから、耐震、耐火に加えて耐湿も考慮して建てられたという堅牢な造りとなっている。また、小田原の伝統的な商家の歴史を感じる出桁造りが特徴であり、熨斗瓦を積み上げた瓦葺きの屋根は、関東大震災後の建物としては珍しい。



江嶋

エ 板橋地区周辺

(7) 下田豆腐店 [街かど博物館]

明治33年（1900）に創業した下田豆腐店は、丹沢水系の水で作られる木綿豆腐や創作がんもなどの販売を行う板橋地区周辺を代表する店舗である。

関東大震災後に建てられた出桁造りの建物では、店内ではおかもちを担いだ行商人姿の写真など、店の歴史をパネルで紹介するなど独特



下田豆腐店

の風情が感じられる店舗である。

(イ) 静山荘 [小田原ゆかりの優れた建造物]

静山荘は、明治 25 年（1892）に建築された民家を長年財界で活躍した望月軍四郎が、昭和 14 年（1939）に上府中村から現在地に移築した建物である。

この建物は、日本農家を別荘にしたもので、書院造りの座敷と民家風の広間が良く調和しており、材料的にも技術的にも高い価値がある。

庭は、小田原では珍しい苔庭で、広く味わいの深いものになっている。手入れの行き届いた老樹、石灯籠、八重の石塔は落ち着いた雰囲気、重厚な建物の奥行きを引き立てており、外の世界を遮断した一つの独立した空間を醸し出している。



静山荘

(ウ) 山月 (旧共寿亭) [登録有形文化財・小田原ゆかりの優れた建造物]

山月は、明治、大正期の実業家（男爵）大倉喜八郎が、大正 9 年（1920）に建築した別荘で、当時は共寿亭と名付けられた。

建物の外観は御殿風に見えるが、内は瀟洒な造りで、唐破風をのせた建築当時様の桜と樺の寄せ木板張り、大広間は、雀と蝶の透かし彫りの鏡板を交互に使った格天井、また、応接間の天井は、網代と杉柱の市松模様といずれも大変手が込んでいる。

庭は、重量感のあるがっしりとした門柱があり、門扉を抜けると、小滝をしつらえた泉や、中国の聖人が配置され、一見不利な地形を利用した豪壮な庭となっている。



山月 (旧共寿亭)

(5) 文化・芸能

ア 相模人形芝居下中座

相模人形芝居は、文楽と同様「三人遣い」という様式で、義太夫節にあわせて1体の人形を3人の使い手が操作する人形浄瑠璃である。

下中座は、江戸時代中頃から「小竹の人形」として知られてきたが、口伝では、上方の人形遣いの一行が江戸への旅興行の途中に小竹村に立ち寄り、村人に技術を伝えたことが始まりとされている。



相模人形芝居下中座

明治時代には、相模人形芝居「中興の祖」と呼ばれる西川伊左衛門の指導により発展し、また、伊左衛門の弟子だった小澤弥太郎、小澤孝蔵らを中心に、戦中、戦後の混乱期を乗り越えた。相模人形芝居は、昭和28年（1953）に神奈川県指定無形文化財に、昭和55年（1980）には国指定重要無形民俗文化財に指定された。

イ 小田原囃子

小田原囃子は、祭囃子の一種で、江戸葛西囃子から発生した関東祭囃子の系統に属する。江戸時代初期から小田原にあった「桐座」という芝居小屋の囃子方が祭好きの近隣の若者に伝えたことが始まりともいわれており、江戸時代中期以降、市内各地に広がり、神社の祭典はもとより道祖神のお祭りにも用いられるようになった。



小田原囃子（小田原囃子多古保存会）

その音曲は、笛、大太鼓、小太鼓、摺鉦すりかねを使用した変化に富んだもので独特の風格を持っている。その技術は地域や保存会などにより保護、継承されており、多古白山神社の小田原囃子は神奈川県指定無形民俗文化財に指定されている。

ウ 鹿島踊り

鹿島踊りは、航海安全と豊漁、さらには悪疫退散の祈願を主体とした神事舞踊の性格が濃いもので、鹿島神宮（茨城県）の鹿島信仰が伝わったものと考えられており、現在は、小田原市石橋を北端として海岸線にそって南下し、静岡県東伊豆町北川までの 22 の神社だけに残っている。

根府川寺山神社の鹿島踊りは、神奈川県指定無形民俗文化財に指定されており、同社の祭礼の日にあたる 7 月の第 3 日曜日とその前日の宵宮で奉納される。



鹿島踊り

エ 大漁木遣唄

大漁木遣唄は、相模湾一帯の漁民、特に西湘地区で古くから歌われている。小田原の大漁木遣唄は、漁業に従事する際の仕事唄と婚礼や神社祭礼時の儀式唄を兼有する例として全国的にも珍しいものである。

木遣唄には神社仏閣廻り数え歌と崩し唄の 2 種類があり、山王原に伝わる大漁木遣唄は小田原市指定無形民俗文化財に指定されるなど、その保存が図られている。



大漁木遣唄

オ 茶の湯

天正 16 年 (1588)、千利休の愛弟子であった、山上宗二が小田原に来往した。『北条記』には、宗二の来往により小田原において茶の湯が流行し始めたこと、早川や荻窪、久野の辺りに茶屋が建設されていたことが記載されている。

また、小田原北条氏の^{いもじ}鑄物師の棟梁であった山田二郎左衛門とその一門によって鑄られた小田原天命と呼ばれる茶湯釜の誕生も宗二の小田原来往による茶の湯の流行と深く関わっていると言われている。

幕末以前の茶道は、大名、豪商、寺院などの庇護を受けた、上流階級の嗜みという性格が強かったが、明治維新後の資本主義経済の発展の中で、実業家の間で日本の優れた伝統文化として再評価され、茶道具や古美術の収集、茶室や庭園の造営が盛んに行われ

るようになった。明治 39 年（1906）には、益田孝が板橋に「掃雲台」を営み、野崎広太（幻庵）、室田義文（頑翁）、横井半三郎（飯後庵）など別荘をもって小田原に居住した人たちと交流を深め、小田原に近代の茶人文化が興隆した。

益田に導かれて茶の湯の世界に入った実業家松永安左エ門（耳庵）は、昭和 21 年（1946）、板橋の地に老櫛荘を造営、移住し、茶会に茶人、政治家、学者など当時の著名人を多く招いていた。また、松永は自身の収集した茶道具などの美術品を展覧するため、昭和 34 年（1959）に瀟洒で洗練された外観の松永記念館を創建、翌年には土蔵風の白亜の収蔵庫や、奈良東大寺にあった蓮池など貴重な石造遺物をちりばめた庭園を整備した。これらの施設は、平成 12 年（2000）に国登録有形文化財に登録された老櫛荘、葉雨庵（南町にあった野崎の別邸^{じいそう}自怡荘内に大正 13 年（1924）に建築され、昭和 61 年（1986）に庭園内に移築）などとともに、近代の茶人として、また美術品コレクターとしての松永の事績を知ることができる施設として整備され、現在も地域の良い歴史的景観を構成する重要な要素となっている。また、その周辺には、野崎や松永らの茶器類の調達に深く関わりのあった江嶋屋陶器店（茶商「江嶋」の暖簾分けを受けて開業）などがある。

加えて、こうした人々によって茶会などが数多く催された小田原では、和菓子も豊富に作られた。幕末の小田原城主であった大久保氏は茶道を好み、城に菓子を納める職人「菓子匠」を商人の中でも優遇するなど、多くの菓子職人が小田原に集まり、茶の湯文化の興隆にあわせて和菓子の文化も生み出されていった。

4 文化財の分布状況

小田原市には数多くの文化財が残っている。美術工芸品を除く、国指定文化財は5件あり、史跡が3件、天然記念物1件、無形民俗文化財1件となっている。史跡のうち史跡小田原城跡については、複数の文化財が対象に含まれている。

また、小田原城下を中心に建造物を対象として、16件が国登録有形文化財とされており、別邸として建築された近代建築や旧東海道沿道に建てられた商店が登録されている。

県指定文化財については、建造物5件、史跡1件、無形民俗文化財2件、天然記念物4件が指定を受けている。

市指定文化財については、建造物10件、史跡11件、有形民俗文化財4件、無形民俗文化財3件、天然記念物21件、歴史資料17件が指定を受けている。

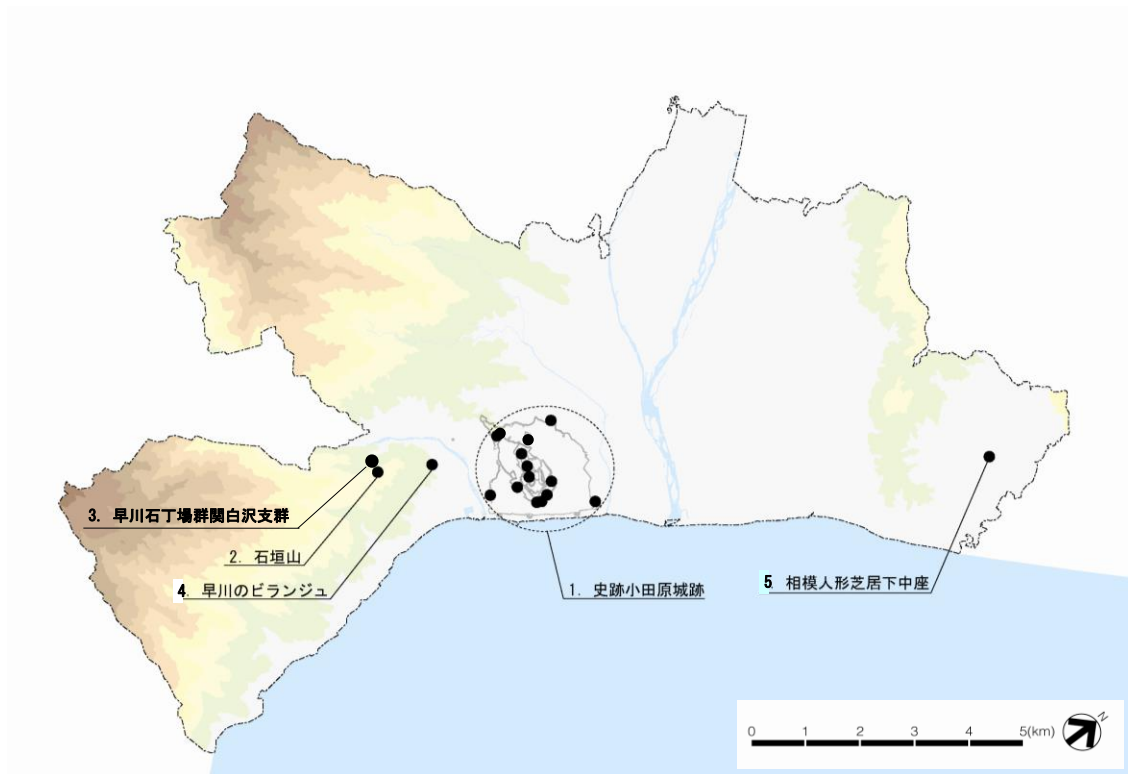
なお、重要文化財のうち、絵画・彫刻・工芸品・古文書・考古資料・歴史資料（以下、美術工芸品等という。）については、位置図及び一覧において記載していない。

指定文化財件数

（令和元年6月1日現在）

類型		国指定	県指定	市指定	国登録	合計
有形文化財	絵画	1	2	9	—	12
	彫刻	2	7	4	—	13
	工芸品	—	1	6	—	7
	古文書	—	—	25	—	25
	考古資料	—	1	4	—	5
	歴史資料	—	1	17	—	18
	建造物	—	5	11	16	32
民俗文化財	有形民俗文化財	—	—	4		4
	無形民俗文化財	1	2	3		6
記念物	史跡	3	1	11		15
	天然記念物	1	4	21		26
合計		8	24	115	16	163

(1) 国指定文化財



国指定文化財位置図

国指定文化財一覧

No.	種別	名称	所在地
1	史跡	小田原城跡 幸田門土塁 大堀切 八幡山古郭 八幡山古郭（東曲輪） 江戸口見附 大手門跡（鐘楼） 三の丸土塁 箱根口門跡 清閑亭土塁 早川口遺構 城下張出 小峯御鐘ノ台大堀切東堀 百姓曲輪	城内ほか 栄町1-91-27 十字四丁目1100-28 城山 城山3-26-1 浜町2-7-17 本町1-5-24 本町1-853-15 本町1-853-217 南町1-5-73 南町4-412 谷津227-29 城山2-316ほか 城山3-1035ほか
2	史跡	石垣山	早川梅ヶ窪
3	史跡	早川石丁場群関白沢支群	早川1394-2ほか
4	天然記念物	早川のピランジュ	早川飛乱地
5	無形民俗文化財	相模人形芝居下中座	小竹

(2) 国登録有形文化財

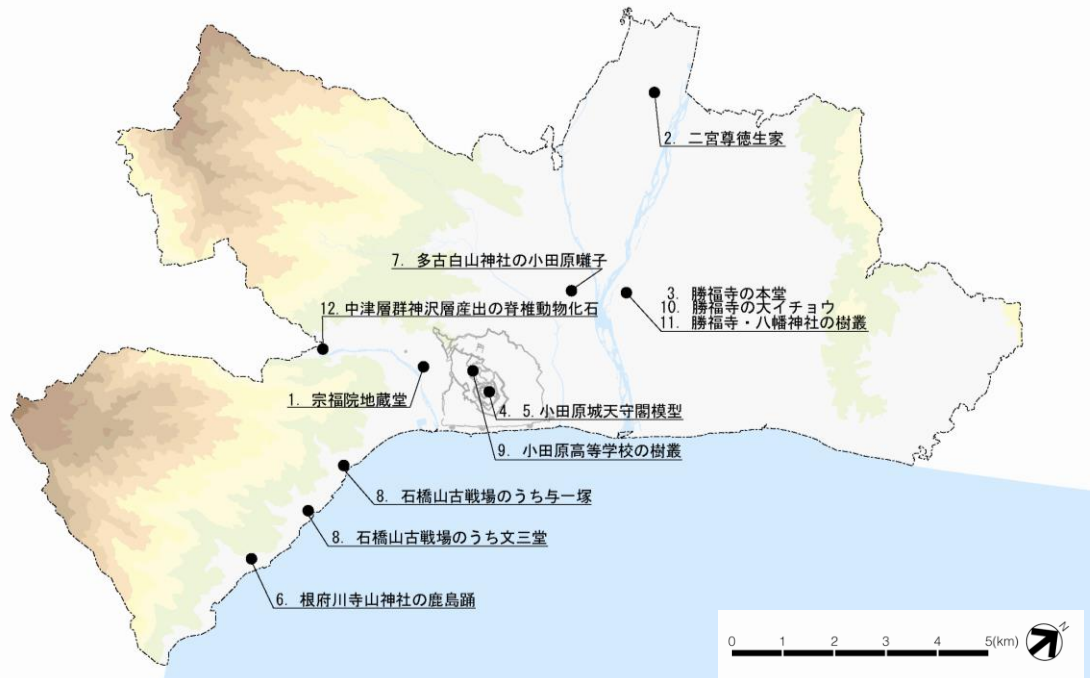


国登録有形文化財位置図

国登録有形文化財一覧

No.	種別	名称	所在地
1	建造物	松永記念館・老樗荘	板橋513-7
2	建造物	山月（旧共寿亭）	板橋913
3	建造物	松永記念館・葉雨庵	板橋941
4	建造物	千世倭樓（旧菊地家住宅）主屋	風祭50
5	建造物	千世倭樓（旧菊地家住宅）土蔵	風祭50
6	建造物	だるま料理店主屋	本町2-1-30
7	建造物	濟生堂薬局小西本店店舗	本町4-2-48
8	建造物	清閑亭	南町1-5-73
9	建造物	小田原文学館別館（白秋童謡館）	南町2-3-18
10	建造物	小田原文学館本館	南町2-3-4
11	建造物	長谷川家住宅店舗及び主屋	国府津3-13-4
12	建造物	長谷川家住宅石蔵	国府津3-2-26
13	建造物	神戸屋ふるや店	国府津4-2-18
14	建造物	岩瀬家住宅主屋	鴨宮692
15	建造物	寶金剛寺庫裏	国府津2038
16	建造物	旧内野醤油店	板橋602ほか

(3) 県指定文化財

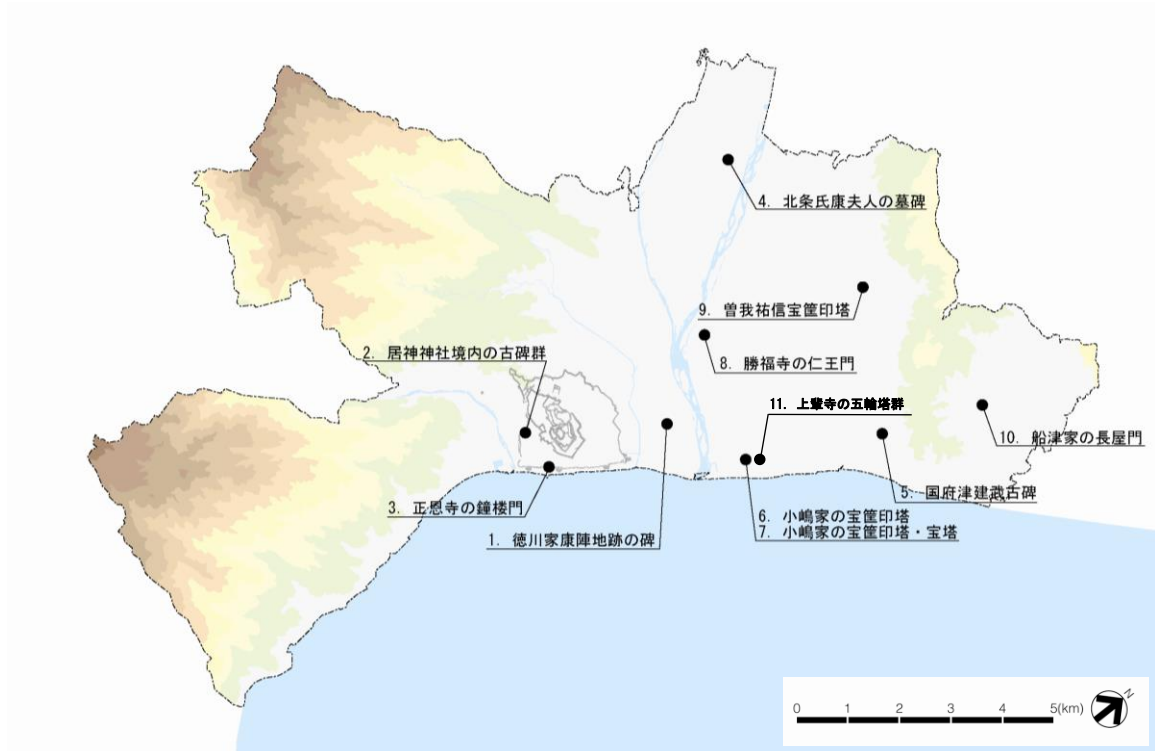


県指定文化財位置図

県指定文化財一覧

No.	種別	名称	所在地
1	建造物	宗福院地藏堂	板橋566 宗福院
2	建造物	二宮尊徳生家	栢山2064
3	建造物	勝福寺の本堂	飯泉1161
4	建造物	小田原城天守閣模型	小田原城天守閣
5	建造物	小田原城天守閣模型	小田原城天守閣
6	無形民俗文化財	根府川寺山神社の鹿島踊	根府川92
7	無形民俗文化財	多古白山神社の小田原囃子	扇町5-7-29
8	史跡	石橋山古戦場のうち与一塚及び文三堂	石橋470 与一塚 米神136 文三堂
9	天然記念物	小田原高等学校の樹叢	城山3-26-1 県立小田原高等学校
10	天然記念物	勝福寺の大イチョウ	飯泉1161
11	天然記念物	勝福寺・八幡神社の樹叢	飯泉1161、1162
12	天然記念物	中津層群神沢層産出の脊椎動物化石	入生田499 県立生命の星・地球博物館

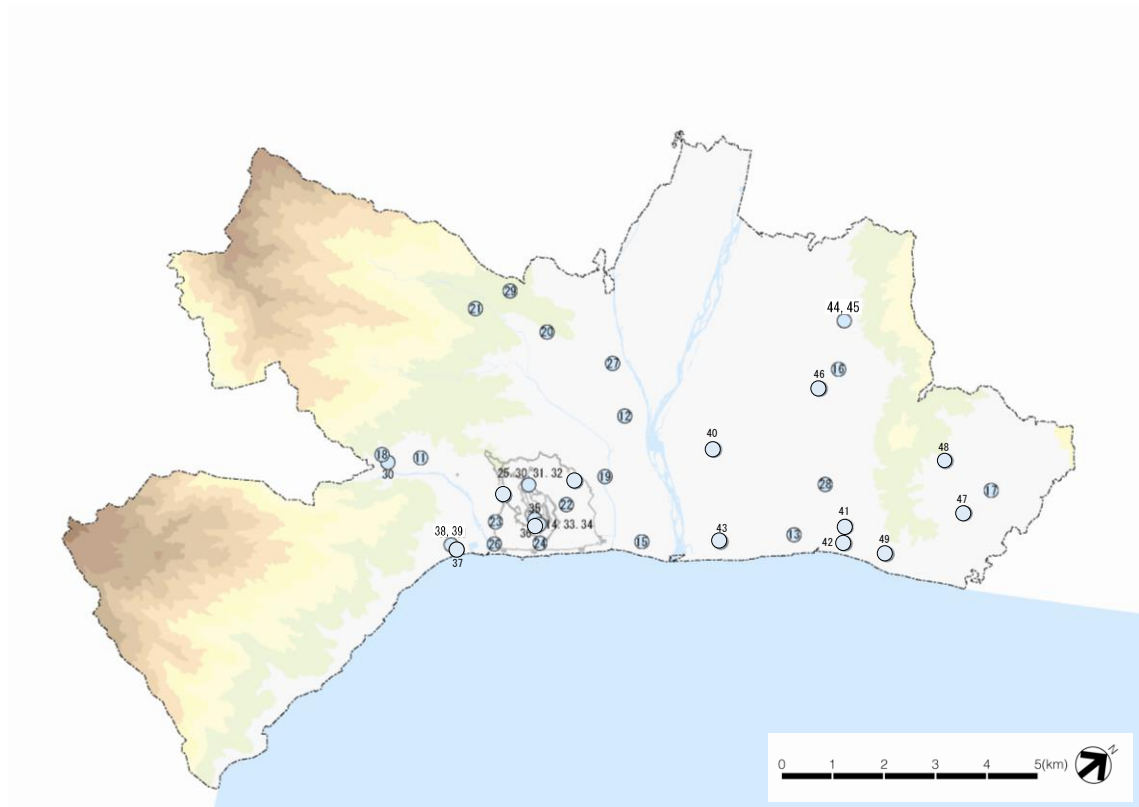
(4) 市指定文化財



市指定文化財位置図（建造物）

市指定文化財一覧

No.	種別	名称	所在地
1	建造物	徳川家康陣地跡の碑	寿町4-14-15
2	建造物	居神社境内の古碑群	城山4-23-29 居神社
3	建造物	正恩寺の鐘楼門	本町4-5-7 正恩寺
4	建造物	北条氏康夫人の墓碑	栢山868 善栄寺
5	建造物	国府津建武古碑	国府津2038 寶金剛寺
6	建造物	小嶋家の宝篋印塔	酒匂2-41-37 大見寺
7	建造物	小嶋家の宝篋印塔・宝塔	酒匂2-41-37 大見寺
8	建造物	勝福寺の仁王門	飯泉1161 勝福寺
9	建造物	曾我祐信宝篋印塔	曾我谷津1159-イ-2
10	建造物	船津家の長屋門	小船139 船津家
11	建造物	上輩寺の五輪塔群	酒匂2-44-27 上輩寺



市指定文化財位置図

市指定文化財一覧

No.	種別	名称	所在地
11	有形民俗文化財	小田原の道祖神	飯泉1105-1ほか6か所
12	有形民俗文化財	玉宝寺の五百羅漢	扇町5-1-28 玉宝寺
13	有形民俗文化財	八幡神社の庚申塔群	小八幡3-1-1 八幡神社
14	有形民俗文化財	田島人形	小田原市郷土文化館
15	無形民俗文化財	山王原大漁木遣唄	東町
16	無形民俗文化財	寿獅子舞	曾我別所
17	無形民俗文化財	白髭神社の奉謝祭	小船609 白髭神社
18	史跡	稲葉一族の墓所と鉄牛和尚の寿塔	入生田467 墓所 入生田454 寿塔
19	史跡	桐大内蔵の墓所	扇町1-15-7 長安寺
20	史跡	久野諏訪ノ原4号古墳	久野2575-イ-2
21	史跡	中世集石墓	久野3261
22	史跡	北条氏政・氏照の墓所	栄町2-7-8
23	史跡	大久保一族の墓所	城山4-24-7 大久寺
24	史跡	明治天皇本町行在所跡	本町3-12-3
25	史跡	明治天皇宮ノ前行在所跡	本町3-5-5
26	史跡	平成輔の墓所	南町3-10-34 報身寺
27	史跡	久野1号古墳	穴部44
28	史跡	田島及び羽根尾横穴古墳	田島1073-1、1075ほか 羽根尾362
29	天然記念物	総世寺のカヤ	久野3670 総世寺
30	天然記念物	入生田のカゴノキ	入生田110

市指定文化財一覧

No.	種別	名称	所在地
31	天然記念物	長興山の枝垂桜	入生田470
32	天然記念物	長興山鉄牛和尚寿塔付近の樹叢	入生田470ほか
33	天然記念物	小田原城跡のイヌマキ	小田原城址公園
34	天然記念物	小田原城跡のビャクシン	小田原城址公園
35	天然記念物	小田原城跡本丸の巨松	小田原城址公園
36	天然記念物	御感の藤	小田原城址公園
37	天然記念物	紀伊神社の社叢	早川1183-2ほか 紀伊神社
38	天然記念物	真福寺のタブノキ	早川892 真福寺
39	天然記念物	真福寺のイトヒバ	早川892 真福寺
40	天然記念物	光照寺のヒイラギ	鴨宮753 光照寺
41	天然記念物	菅原神社のムクノキ	国府津1752 菅原神社
42	天然記念物	真楽寺のボダイジュ	国府津3-2-22 真楽寺
43	天然記念物	上輩寺の乳イチョウ	酒匂2-44-27 上輩寺
44	天然記念物	須賀神社のクスノキ	上曾我902 須賀神社
45	天然記念物	瑞雲寺のモッコク	上曾我902 瑞雲寺
46	天然記念物	三島神社のケヤキ	千代278 三島神社
47	天然記念物	広済寺のカキ	中村原691 広済寺
48	天然記念物	王子神社の杉	沼代506 王子神社
49	天然記念物	前川近戸神社の社叢	前川1431 近戸神社